トラック島の日系大酋長が見せた大和魂と謎

―元プロ野球投手ススム・アイザワ大酋長が森喜朗元総理、佐々木信也氏と結んだ絆―

エッセイスト　近藤節夫

はじめに

これは現代サクセス・ストーリーと呼んで大風呂敷を広げて語るようなドキュメントではない。

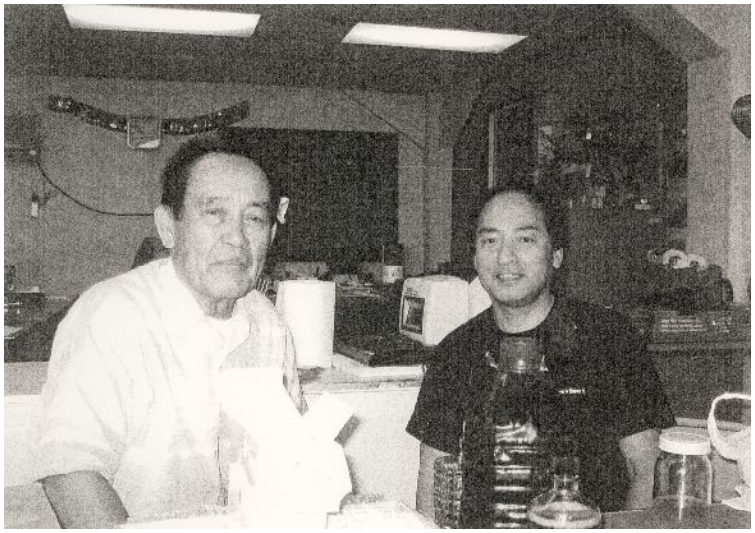
大正の初期、青雲の志を抱いたひとりの日本男児が、南方へ向かう途次病のため立ち寄ったトラック島で「色は黒いが南洋じゃ美人」の酋長の娘と結ばれ、二人の間に生を享けた逞しきひとりの男の秘められた不屈の物語である。

トラック島に生れ育った男は、一時日本のプロ野球界で活躍していたが、突如チームの解散という前代未聞の椿事により、理不尽にもチームから放り出されてしまった。

物語は、主人公ススム・アイザワ(相澤進)が失意のうちに日本を去り、生まれ育った故郷のトラック島へ帰るまでの将来に希望が見出せなかった前半生と、その後反骨精神を胸に新たな事業の道で成功し、ミクロネシア連邦チューク州(旧トラック諸島)酋長会議議長(大酋長)に推され、ミクロネシアで社会的に大きな影響力を及ぼすまでに至った栄光の後半生を描いたものである。

ここでは故郷トラック島で何の衒いもなく淡々と語るススムの話に、ススムの身内や個人的に袖触れ合って交流を深めた人々の話を重ね合わせて、その人生模様をドキュメンタリー風に描き綴った。

燃えるような炎の男、ススム・アイザワの茨の道のトレースを追っていると、自らの戦いの過程で敢えて厳しい世間の荒波に立ち向かい、自らの存在を確立した強い反骨精神を知らず知らずのうちに感じ取ることができる。そのしたたかでバイタリティ溢れる行動力には思わず頭を垂れさせられ、同時にススムから秘かに洩れてくる呻吟の声と謎を包む暗い影に触れて深く考えさせられもするのである。



ススム・アイザワ大酋長（左）と親戚の相澤光春氏　2000 年ごろ

いまから三〇年ほど前、南洋の小さな島・トラック島で私は初めて大酋長ススム・アイザワに巡り会った。そのころススムは、周辺諸島において大きな影響力を持ち、「伝統的指導者」と呼ばれる大酋長の座に就いていた。初めての対面は私にとって思いも寄らず母校の「先輩」だったという奇縁のような出会いともなったが、そのお陰でその後ススムから仕事のうえで温かい心配りをしていただいた。まさに「ひょうたんから駒」と呼んでもよい僥倖とも言えるものだった。

その時を境に大酋長ススム・アイザワの波瀾万丈の生涯について強い関心を抱き、興味を持つようになった。時にはその言動は些か不可解で疑問を抱かせることがあり、周囲にカリスマ的な雰囲気も漂わせていた。その反面正義感があり男気もあって魅力的なキャラクターであるススムのような快男児を知り得たことは、まさに千載一遇の「幸運」に尽きると思っている。

その意味でたとえ万分の一の縁にせよ、不思議なめぐり合わせに感銘を憶え、いまは亡き偉大なる「先輩」大酋長に熱い思いと敬愛の気持ちが湧いてくるのである。

Ⅰ　戦前、戦中の中部太平洋とトラック島

遥か彼方ヨーロッパの地で戦われた第一次世界大戦が終焉を遂げ、敗戦国ドイツがそれまで支配していた太平洋海域に点在する南洋諸島のうち、一部を除き赤道以北の中部太平洋の島々における国家としての統治と権益を、日本がドイツに替わって国際連盟から正式に委ねられることになった。

「笹川太平洋島嶼国基金」地図より部分引用・一部加筆修正

しかし、それ以前にイギリスと同盟を結んでいた日本は、一九一四年第一次世界大戦勃発と同時に、はやばやと敵国ドイツが支配していた南洋諸島の島々へ進出した。中でも中部太平洋海域を統治するために、日本は一九二二年同海域の中心であるカロリン海域パラオ

諸島の中心・コロール島に、手塚敏郎を初代長官とする南洋庁を設置して、広域的にマーシャル諸島、トラック諸島、マリアナ諸島など中部太平洋諸島のほぼ全域を治め、それぞれに支庁を設立した。

そのうちのひとつ、トラック諸島の夏島（現トノアス島）にも支庁が設立され、春島（現ウエノ島、チューク州の州都でチューク国際空港がある）と水曜島（現トール島）には分支庁が置かれた。委任統治は、当然統治国日本の法令の下に執行されたが、同時に当時の国際連盟が制定した「委任統治条項」をも受け入れなければならなかった。その点で植民地化した朝鮮、台湾、南樺太や、その他の一部の占領地とは政治統制の方法が異なるのは、当然と言えば当然だった。

日本の統治が始まったことと国の南進政策により、明治末期から昭和初期にかけ、沖縄や日本内地、とりわけ九州、首都圏、東北方面から数多くの日本人が海を渡り南洋諸島へ移住して行った。一九四〇年（昭和一五年）には、南洋諸島周辺で五万人の島民に対して日本人の数は実に八万五千人にも膨れ上がっていた。

その当時の南洋諸島には、心配されるような異民族間におけるトラブルはほとんどなかった。かつての占領国、スペインの無関心さや差別意識の強かったドイツとは異なり、日本人と島民との間には平和的な融和の空気と心の通い合いがあり、日本の執政官には、島民を軽視するような上から目線の態度や差別的な言動は見られず、日本人に接するのと同じように対応していたからだと考えられている。

日本は商取引ではまだ物々交換が一般的だった島へ貨幣経済を導入したり、学校がなかったトラック島内に、新たに学校を作って経済社会や文化のインフラ基盤の構築にも多大な貢献をした。初等教育の現場では、文部省の国定教科書を使用して日本語による教育を行い、一部の学校では日本人生徒と島の生徒が机を並べ、仲良く学ぶ姿が見られた。このように長年に亘る社会基盤の整備と日本語教育による宣伝・啓蒙効果もあって、日本人と島民とはお互いに強い友情と信頼感で結ばれていた。

実際戦後になっても暫くの間、南洋諸島では戦前・戦中と同様に日本語が普及し使われていた。島民に対する公文書も一部日本語で綴られ、日常会話は現地の言葉であっても文字は片仮名を主とする日本語が使用されたほどである。街角の掲示板に貼り出された公報や告知、連絡通報なども片仮名で書かれていたほどだった。

四半世紀前ごろまでは南洋諸島の島内をひとりで歩いていたりすると、年老いた島民から「こんにちわ。どこから来たの？　日本から？」などと日本語で気さくに声をかけられたものである。

このように島では日本人為政者と島民との間に障害となるような垣根はなく、大きな揉めごとはほとんど見られなかった。むしろ島民同士の間に諍いが起きると、その場に居合わせた日本人がしばしば仲裁に割って入ったと島の古老は語ってくれる。その点では南洋庁は委任統治領において民族の如何を問わず公平な対応をして、ある面でモラル上模範的な統治を行っていたと言っても過言ではない。

これには、前記の「委任統治条項」に盛られていた、①地域住民の福祉、②奴隷売買と強制労働の禁止、③島民に対する軍事教練の禁止や酒類供給の禁止、④軍事基地設置の禁止、を日本が遵守し、

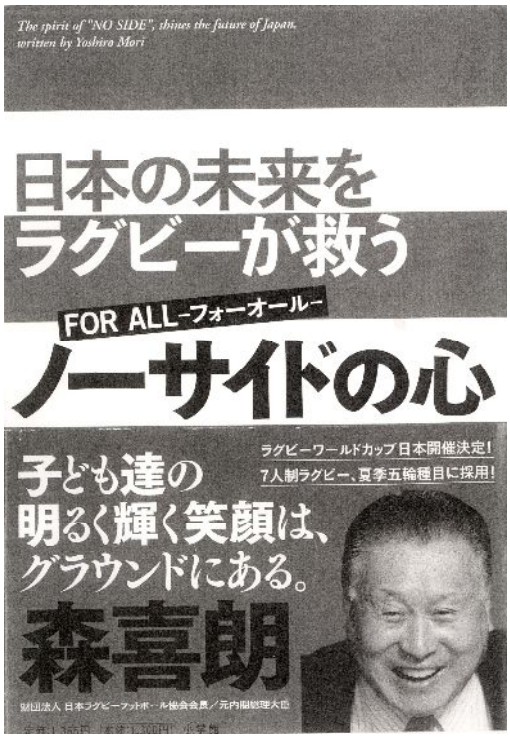
日本人と島民の実生活においてお互いの風習に束縛を加えないことを約束したことも効果を上げていたからだと考えられている。その点で南洋庁は日本人と島民との共存関係だけに留まらず、島に居住するその他の外国人との対応と交流にも木目細かく配慮していた。

心温まるこんなユニークなエピソードもある。戦前トラック諸島には同盟国の英米人兵も数多く駐留し、学校の校庭や空き地ではイギリスの国技・ラグビーをプレイする光景がしばしば見られた。戦争も末期になって満州・牡丹江から大日本帝国海軍の基地だったトラック島へ陸軍独立混成第五一旅団独立歩兵第三三八大隊が転属してきた。その大隊を率いていたのが戦前早稲田大学ラグビー部で活躍した、大隊長の森茂喜陸軍大尉だった。森喜朗第八五・八六代内閣総理大臣の実父である。森は部下の隊員と島民の混成ラグビーチームを作り、その当時捕虜だったイギリス人チームとも親善試合を行った。ラグビーボールが手に入らない島で自分たちの工夫によって布地で特製の楕円形ボールを作ってまでしてプレイした。このように太平洋上の戦地であるトラック島で、森大隊とイギリス人捕虜チームはともに憎みあうことなくラグビーを心行くまで楽しんで、戦時中の鬱積した気持ちを晴らしたり、その他にもボランティア的な活動を通して敵国の兵士や島民たちと分け隔てなく親しく交流を続けていた。

まさにラグビーの真髄である《ONE FOR ALL, ALL FOR ONE》（ひとりはみんなのために、みんなはひとりのために）スピリットを戦場においても遺憾なく発揮していたのである。

終戦となって今度は森茂喜ら大隊兵士が捕虜となったが、日英両国軍人はお互いを恨むようなこともなく、戦時中と同じように親善試合を楽しんだ。これもイギリス軍兵士の心情に、かつてのラガーマン仲間を敬うラグビー精神が胸の奥深く宿っていたからではないだろうか。これもまたラグビーを象徴的に表現する「ノーサイドの心」（左・森喜朗著書）の素直な発露である。茂喜にとって捕虜という辛い境遇の中でも一筋の光明を見出すことができたのは、まさにラグビーのお陰であり、ラグビーを絆にして結ばれた日英両国軍人と島の人々との間に心温まる気持ちのつながりがあったからこそである。

森元総理自身も父の意を受け継ぎ、少年時代からラグビーに親しみ石川県立金沢二水高校ではラグビー部キャプテンとして、また早稲田大学でも一時ラグビー部でプレイした。



ラグビーの楽しさと素晴らしさを訴えた

戦後いち早く故国日本へ復員が許され、森大隊がトラック島を離れる時、埠頭で別れを惜しむ多くの島民が見送る中で、親しくなったイギリス人指揮官が、友情と感謝の印として身に着けていた腕時計を腕から外して敵国士官だった森茂喜大尉に贈った。今それは父がトラック島における思い出を秘めた形見として、息子である森喜朗元総理の手元に大切に保管されている。

戦前島民に対して分け隔てなく接した森茂喜は、島民の誰からも慕われ、戦後島を去ってからも島の人々が茂喜を忘れることはなく、茂喜もまた彼らの優しい気持ちを忘れることはなかった。

翻って第Ⅰ章冒頭に記した通り、第一次世界大戦勃発と同時に国際連盟によって付託された「委任統治条項」は、委任統治直後しばらくの間は南洋庁によってきちんと遵守されていた。

しかし、一九三三年（昭和八年）日本が国際連盟脱退を通告し、翌三四年ワシントン海軍軍縮条約を破棄すると、この条項は次第にないがしろにされるようになり、中でも日本にとって不都合な「軍事基地設置の禁止」は無視されるようになった。日本は太平洋戦争開戦とともに南方支援作戦の根拠地として、トラック島に太平洋海域上最大の海軍基地を建設し、ここに中部太平洋第四艦隊司令部を置き、ひととき戦艦「大和」や「武蔵」を旗艦とする連合艦隊が移動してきた。環礁によって周囲を囲まれているトラック諸島は、自然環境によって天然要塞化され海上から敵の侵入を守るのは比較的容易だった。その反面山野が少なく、見通しがよく利く地形の平坦な島は、米空軍機による空からの攻撃に弱点を晒し、戦争が激しさを増すにつれ日本軍の戦況は次第に不利になっていった。

一九四四年二月初め、大日本帝国海軍は米空軍機による空襲を避けるために連合艦隊を再び日本国内へ戻したが、その僅か二週間後の一七日から一八日にかけて行われた米空母からの米軍機動部隊の奇襲作戦により、環礁の外に停泊していた日本の陸軍輸送船を含む五〇隻の艦船が撃沈され、七千人以上の兵士が一瞬にして海の藻屑と消えた。環礁内の島々に建設された飛行場や補給基地も米空軍機の攻撃に曝され軍用機二七〇機が損壊されて、日本軍の陸・海軍基地は壊滅的な打撃を受けた。駐屯していた陸軍部隊も補給路を断たれ、日本軍兵士のみならず軍属、民間人を含む日本人居留民は孤立無援の状態となり、大日本帝国海軍で最大規模を誇った、さしものトラック海軍基地も落日を迎えることになった。米軍による攻撃はその後も益々激しさを加え、日本軍にとって絶対国防圏と考えられていた太平洋上最東端の東カロリン諸島・トラック海軍基地が陥落したことにより、米軍の攻撃は西カロリン諸島のパラオ諸島へ展開されていった。そして一九四四年六月にはマリアナ諸島サイパン島への激しい攻撃となり、「サイパン島玉砕」の悲劇を生んでいくのである。

太平洋戦争による軍人、軍属、民間人を併せた日本人犠牲者の数は膨大で、実に三一〇万人を数える。戦後六六年を経た今日なお多くの英霊が母国へ帰ることなく異国の山野にその屍を晒している。その中でも中部太平洋海域における軍人、軍属、民間人を併せた犠牲者の数は約二五万人に達し、犠牲者の数においてはフィリピン、中

国大陸に次いで多い。中部太平洋海域に犠牲者が多い原因のひとつは、同海域諸島には戦前から日本人が数多く移り住み、日本人居住者の数が多かったことと、軍民ともに「玉砕」したサイパン島の悲劇が含まれているからだと考えられている。

Ⅱ トラック島の日系少年と冒険ダン吉

日本からおよそ四千km離れた南方洋上の環礁に大小三〇〇近い島々からなるトラック諸島（現在のチューク諸島）の水曜島（現在のトール島）に、日本人相澤庄太郎と島の酋長ルエッペンの娘ノツムールとの間に生れた運動神経に秀でたひとりのスポーツ少年がいた。その少年こそ冒頭に紹介したススム・アイザワ、その人である。一九三〇年（昭和五年）六月九日トラック島で三男六女（三男は早世）の二男に生まれたススムは、戦後の一時期日本のプロ野球界で活躍し、後に周辺全諸島の大酋長となってミクロネシアの発展に貢献することになる。

時を遡る一九一四年（大正三年）、ススムの父庄太郎は国家の南進政策にいやが上にも士気を鼓舞され、強い志を抱いて同志とともに南方へ向かった。ところが、立ち寄ったトラック島で折悪しく健康を害ししばらく療養する羽目に陥った。幸い島には南洋貿易㈱（後の南洋興発）トラック支店があり、そこで雇われた庄太郎は支店に勤めながら健康回復に専念することができた。

実は、南洋のトラック島へ日本人が訪れたり、移住した話はそれ以前からいくらもあった。日清戦争以前から日本国内に澎湃として沸き起こった海外雄飛、海外殖産の夢と国家の南進論に駆られるように、或いは南方貿易の成功を夢見て、多くの日本人独身男児が南方の島々へ赴いた。

彼ら日本人移住者の中で最も知られているのは、一八九二年（明治二五年）に南洋雄飛のパイオニアとしてトラック島へ渡り、島の酋長の娘を娶って母系社会の中で日本人酋長の先駆けとなった土佐藩郷士の倅・森小弁（一八六九～一九四五）であろう。島田啓三が一九三三年（昭和八年）から六年余に亘って雑誌「少年倶楽部」に連載し、田河水泡の「のらくろ」と並んで、軍国主義が高揚してきた戦前の軍国少年たちの夢と憧れを掻きたてた絵物語「冒険ダン吉」のモデルが、実は森小弁ではないかとの噂が湧き上がり、いつとはなしに真実味を帯びて語り伝えられるようになった。事業に成功し、社会活動にも奉仕して地域社会で尊敬されるまでになった小弁は、多くの子孫を残し、南洋諸島における立志伝中の人物として、ある意味で海外雄飛を夢見る青少年の憧れと考えられた。

南進論の積極的なムードが高まる中で、自由民権運動に失望した

森小弁が一転して南洋に出かけ、そこで事業に成功した出世物語が、当時の国策にタイミング的にぴたりと合った。時代環境的にも成功者・森小弁の姿に「冒険ダン吉」をダブらせることによって、国にとっても願ってもない海外雄飛ムードを煽ることになり、「夢」とも「希望」とも思える「森小弁＝冒険ダン吉」の妄想が、リアルなイメージを膨らませていったのではなかろうか。ある意味で知らぬ間に国のプロパガンダに乗せられた「森小弁＝冒険ダン吉」の誕生だったように思える。

しかし、真実は原作者・島田啓三自身がきっぱり否定しているように、「冒険ダン吉」に具体的なモデルは実在しない。南進論の影響もあり原作者は「ダン吉島」の舞台は南の島だと漠然と考えていたようだが、「動物どももアフリカ、インド、南米、ボルネオ産などがゴチャゴチャに登場、回が進むにつれて、ダン吉島の所在がどの辺なのか、見当がつかなくなってしまった」（少年倶楽部文庫「冒険ダン吉」②あとがき）と述懐しているように、原作者自身少々困惑気味だった。実際トラック島では「冒険ダン吉」に登場するような野生動物の象やライオン、カバ、ダチョウ、ラクダ、キリンなどはまったく見かけないし、私自身遺骨収集事業の折、森小弁の孫でエマニュエル・モリ現ミクロネシア連邦大統領の父でもあるマサタカ・モリに何度かお会いしたが、そのマサタカからついぞ「冒険ダン吉」に纏わる話は聞いたことがなかった。

島田啓三画「冒険ダン吉（2）」表紙　講談社発行

こうしてみると、主人公「冒険ダン吉」と「ダン吉島」はあくまで幻想の世界で考えられたフィクションと考えるのが穏当なところであろう。それでいて今でもなお「冒険ダン吉」に昭和のロマンを被せて、トラック島で活躍した森小弁を「冒険ダン吉」のモデルと考えたがるノスタルジックな人は多い。奇縁にもその小弁の孫のひとりが、誰あろうススムの妻リリー（ユリエ）なのである。後年になって「冒険ダン吉」に似た環境の中で同じような活躍をしたススムにしても、意外なほど小弁とは実生活においても浅からぬ地縁関係にあり、冒険心を抱えたその活躍ぶりもどこか小弁に似通ったところがあるのではないだろうか。

庄太郎が初めてトラック島を訪れた時、そこには水産業やタロイモ、サトウキビ、コブラヤシのような第一次産業以外に取り立てて目ぼしい産業はなかった。

その小さな島でその後貿易関係の仕事で商才を発揮した庄太郎

は、幸い島内で事業に成功し、瞬く間に日本人ばかりでなくトラック島民の間でもその存在を知られるようになり、徐々に事業家としての評価と人望が高まっていった。

そんな折トラック諸島水曜島の実力者だった大酋長ルエッペンの耳に事業家相澤庄太郎の噂が入り、その事業手腕と豪胆で才気活発な性格を見込まれた庄太郎は、芳紀まさに一五歳だったその娘ノツムールの婿として迎えられることになり、女系社会の島内でも由緒ある大酋長一族へ仲間入りすることになったのである。

大酋長ルエッペンには、正義感が強く直情タイプの人物だったとの記述が残っている。モリ現大統領の曾祖父・森小弁とも親しかったルエッペンは、親しい仲間の酋長が日本人警官に女房を寝取られたことに憤慨し、その相手を島の掟に従い悪びれず殺害した。その武勇伝は後々まで島内で語り伝えられた。ルエッペンはそれほど直情径行型で正義感と行動力に溢れていたようだ。ある面でススムにも祖父譲りの生一本のＤＮＡが継承されていたかも知れない。

こうして島内名門の家系に生まれ育ったススムは、次第に日本の戦況が不利に傾いていく中でも周囲の温かい愛情に支えられて、島の伝統と風習の中で自由奔放なガキ大将となって何不自由なく成長していった。

戦争が激しくなっていった一九四二年三月、ススムはトラック島の小学校（当時国民学校）を卒業した。生憎島内に中学校がなかったために父庄太郎の教育方針により、日本内地で中等教育を受けることになった。開戦から半年足らずの同年四月、ススムは泣く泣く両親や姉妹と別れさせられ、帰国する父の友人に連れられて初めて父の母国・日本へやって来た。ススムは神奈川県藤沢市辻堂にある長兄相澤重太郎が当主だった父の実家相澤本家へ預けられ、そこから地元の旧制神奈川県立湘南中学校に編入し、そこで学ぶことになった。同じく父の方針で一足先に日本へ来ていた一一歳年長の兄南（ミナミ）や、大勢の親戚に囲まれ賑やかな共同生活を送ったが、まだ中学生になったばかりの少年ススムにとっては、恋しい両親や姉妹と別れて暮らす日本での生活は、心中辛く寂しいものだったに違いない。

一九四五年八月一五日、日本軍の降伏により状況は一変した。南洋諸島にいた日本の民間人は進駐してきたアメリカ軍により日本への帰還を強く迫られた。ところが、反面それはススムにとって喜ぶべきこととなった。終戦から一年半後の一九四七年初め父庄太郎が日本へ引き揚げ、父子は五年ぶりに日本で再会することができたからである。

ススムは幼いころから近くの海で毎日のように素潜りをしたり、少年野球などに熱中していたが、日本に来てからはとりわけ野球に非凡な素質を開花させた。だが、周囲に親戚以外あまり頼れる人がいなかったススムが、日本で生活していくうえに天与の稟質である野球の才能に恵まれ、通常の社会人としての経験も経ずにいきなりプロ野球選手になったことが、後に記すようにススムにとって果たして幸いだったのかどうかは何とも言えない。日本で野球に恵まれた才能が反って自らに変転目まぐるしい苦悩を強いる結果になり、同時に日本社会で不条理と理不尽を存分に思い知らされることにもなったからで

ある。

一時的にもせよ日本プロ野球界で力を揮いながら、その挙句にあるまいことか、所属チームの抜き打ち解散というプロ野球史上空前絶後の荒療治によって、ススムは情け容赦なくペナントレース開幕直前に寒風の真っ只中に放り出されてしまったのである。ススムは日本での生活を切り上げ、後ろを振り返ることなく、生れ故郷のトラック島へ戻ることを決断した。

そして二年後懐かしい島へ戻ったススムは、一念発起して血の滲むような努力と苦労の末に、第一歩からスタートさせた事業を何とか軌道に乗せることができた。それから長じてトラック諸島三六人の地域酋長らに推されたススムは、勇躍酋長会議議長（大酋長）の座に就くことにもなった。それにしてもススムの辿った人生行路はそのまま、時代を超越し、国境を越えた血湧き肉踊るドラマチックな冒険物語と呼べるのではないだろうか。

Ⅲ　大酋長との出会いと謎を秘めた言葉

一九六〇年代後半から鉄道会社で旅行業務に携わっていた私は、各地の遺族会や戦友会の紹介をいただきながら、毎年のように慰霊巡拝団を企画しては関係者を旧戦跡地へ案内していた。

七二年一月、その当時から確かな情報が得られず「知られざるビルマ」（大野徹著、芙蓉書房刊）と呼ばれていたビルマ（ミャンマー）へ、戦後初めて旧第三航空軍・第五飛行師団隷下にあった「飛行第六四戦隊（加藤隼戦闘隊）慰霊巡拝団」を企画し訪問した。

かつて「鉄脚のエース」と呼ばれた隻脚のパイロット、檜興平氏（陸士53期）ら同戦隊出身士官から、戦時中日本の陸軍士官学校で教育訓練を受けた、ネ・ウィン大統領をはじめとしてチョー・ゾー外相、チッ・キン内相、エー・モン文化相ら当時の主要閣僚が、「戦後のハヤブサ部隊」一行を熱烈に歓迎してくれ、ビルマ政府迎賓館「ダゴン・ハウス」で盛大な歓迎レセプションを開き一行を歓待してくれた。それがメディアを通じてビルマ全土にセンセーショナルに伝えられ、現地で大きな話題となって時の鈴木孝・ビルマ駐在日本国特命全権大使ら大使館関係者をはじめ在留邦人を驚かせた。

七四年三月一二日には、「第一回飛行第一二戦隊（重爆撃機隊）南方基地慰霊巡拝団」の鹿島立ちが、偶々羽田空港でその同じ日にフィリピン・ルバング島から戦後二九年ぶりに帰国する小野田寛郎・元陸軍少尉搭乗の特別機到着時間とぶつかり、その熱狂的な帰国歓迎風景と、その一方で粛々と戦友の慰霊に向かう当慰霊巡拝団が対照させられ、「往くひと・還るひと」と新聞紙上にニュース性を盛り込んで広く報道された。

ちょうどそのころ厚生省援護局（現厚生労働省社会・援護局）から、戦後処理の一環である「太平洋戦争戦没者遺骨収集事業」のうち、「中部太平洋戦没者遺骨収集団」に関する業務を一括して請け負うことになった。私は民間の慰霊巡拝団のほかに、国家事業の派遣と作業に関わる連絡事務、輸送、宿泊などの手配、並びに現地における一連の受け入れ業務にも関わることになった。

本事業については毎年二月になると財団法人日本遺族会を中心に、全国各地から馳せ参じる関係者と関連団体で構成される戦没者遺骨収集団が、約一ヶ月に亘って灼熱の太陽の下をジャングルの奥深く入り込み、国家のために散華された戦没者の遺骨を収集し、祖国へ奉還する険しい作業に献身的に取り組んでいた。

遺骨収集団が派遣されると私もその期間中、厚生省派遣団長や遺骨収集団員とともに派遣団本部が置かれたサイパン島のハファダイビーチ・ホテルに滞在した。その間周辺海域の島々から新しい情報がもたらされると、サイパン島の本部からそれらの島々へメッセンジャーとして派遣されることも度々あった。

派遣先は、主として原爆投下のため広島と長崎へ向け【B－29爆撃機】が飛び発ったテニアン島が多かったが、同じ中部太平洋の東カロリン諸島のトラック島、ヤップ島、西カロリン諸島のパラオ本島やコロール島、ペリリュー島、アンガウル島、マリアナ諸島のグアム島、ロタ島などにもしばしば出かけては、それぞれの島の役所や税関、警察、保健所、土地の協力者らに団長から委ねられた遺骨収集概要、スケジュール表、依頼要旨や特命事項を伝えたり、同時に各島で得られた新たな戦没者の遺骨発見情報などを本部に持ち帰ることもあった。

一九八三年二月のある日、派遣団長からトラック島へ飛んでほしいと内々に打診があった。トラック島の気難しいビッグ・ボスに会い、一部の便宜供与願いに対する回答をもらって来てほしいとの依頼だった。その時私が面会しようとしたボスこそ、まさに当時トラック島でホテル、レストラン、スーパーマーケット、ヤマハ代理店などの事業を手広く展開し成功させて、トラック島内外でも実業家として名を馳せ、羽振りの良かったスズム・アイザワ大酋長だったのである。

初めてスズムに会った時、直感的にこれは噂通り相当手強い人だなと感じた。以前会った温厚タイプのマサタカ・モリとはすべての面で違った。肌は浅黒く、精悍な顔つきに恰幅のいい身体から伝わってくるド迫力に、少々緊張していた私は黙ったまま大きな目でギョロリと睨まれ、思わず立ち竦むほどの強い威圧感に圧せられたものだった。

「あんた、厚生省の使いの者か？」

といきなりぶっきらぼうに立ったままの私を下から見上げ、しばらくしてから、

「まあわざわざサイパンから来たんだから、あんたが帰る明日までに返事は書いといてやるよ」

団長の信頼に応えられる色よい返事がもらえるかどうか些か気になっていたが、何とか役目は果たせそうなのでほっとした。雑談をしている内に徐々に打ち解け寛いだ表情になったスズムは、夕暮れが近づいてくると奥の冷蔵庫からビールを取り出してきて一杯やりながら話を続けた。

戦時中の米軍機による爆撃、戦時下の島の様子、戦後これまで関わった戦没者遺骨収集事業への協力具合や島の世間話、更に日本におけるプロ野球選手時代のエピソードと、高校の同窓生でプロ野球でもチームメートだったという野球解説者・佐々木信也氏についても身振り手振りを交えて気軽に語ってくれた。やがてアルコールが効いてきたせいだろうか、大分機嫌が良くなり最初の仏頂面が次第に柔和

な顔になり話題もくだけて、島の因習だった「夜這い」で男が想いを寄せている女の家に忍び込んだ時に使う「ニペペイア」とも、「ラブ・スティック」とも呼ばれる「夜這い棒」を手に、その使い方などを面白おかしく聞かせてくれた。そのうちに空いたグラスにビールを注いで、

「まあ、あんたも一杯やんな」

と私にも気軽にビールを勧めてくれた。アルコールを勧めてくれたということは、ススムが厚生省の回し者？である初対面の私に胸襟を開いてくれた証拠であるとその晩になって分かった。

実は、その晩豪華なコテージ・スタイルのトラック・コンチネンタル・ホテル（現トラック・ブルーラグーン・リゾート）に一夜の宿を取ったが、ススムとの話し合いがスムーズに進んだことに幾分気を良くして、離れのコテージ・バーへ出かけた。満天の星の下でひとり乾杯をしようと早速ビールを注文したところ、バーテンダーから飲酒許可証の提示を求められたのである。最初はその意味が理解できずに「？」と首を傾げていたところ、隣に座っていたアメリカ人観光客から、トラック島ではアルコールを飲もうとしても証明書がないと飲めない。このホテルでは外国人観光客用に滞在中一米ドルで特別に証明書を発行してくれるので、フロントで発行してもらったらよいと教えてくれた。

実際その当時トラック島内では、始終酒のうえでの酔っ払い同士の喧嘩が絶えず、派手な大立ち回りや刃傷沙汰も度々起きて、ついに行政当局が島内での飲酒を禁止してアルコールを飲みたい島民には、資格審査をしたうえで飲酒許可証を発行するという些か乱暴な法律が執行された。流石に今ではそんな時代錯誤の法はなくなったようだが、言ってみれば、見ず知らずの他人に妄りにアルコールを飲ませ酔っ払わせてはならないという掟がまかり通っていたのである。ススムが初対面の私にビールを勧めてくれたということは、ある面で私に心を許してくれた証だったのである。

それにしてもこの一件を以ってしてもいかに島民が酒好きで、飲みだすと見境がなくなるほど興奮しやすい性格であるかということが想像できると思う。同時に前記国際連盟の「委任統治条項」の中に、特別に「島民に対する酒類供給の禁止」の一項が明記されていることにも幾分納得がいくのではないか。

それはともかく、ススムは父の母国であり、自らも一一年余過ごした日本の生活についても率直に、腹蔵なく話してくれた。その時何気なく話してくれた世間話の内容が、今もって謎に包まれたままなのである。

「トラックから引き揚げて中学は神奈川の湘南に入った」

「佐々木信也は学校の後輩だったので、俺が『高橋ユニオンズ』に誘って入ってもらった」

「信也は何度かトラックの俺のところへ遊びに来た」

幸いにしてススム・アイザワ大酋長が私に対して気軽に話してくれるようになったのは、佐々木信也さんが学校の後輩であると話してくれた時に、実は私も佐々木さんと同じ高校の出身だと名乗ったことがきっかけである。

「なに？　近藤さんも湘南？　湘南で何かやってた？」

「はい。ラグビーをやっていました」

森喜朗元総理が高校時代ラグビー部のキャプテンを務めていたように、私自身も不束ながら高校ではラグビー部キャプテンとしてチームメートとともにグラウンドで土にまみれていた。

ススムはまさか太平洋上のこんな小さな島で母校の後輩に突発的に出くわすとは思いもよらず、このハプニングには流石に驚いたようだった。だが、残念ながらその時懐かしい母校の話題が、ラグビー以外に進展することはなかった。

ススムも学んだ？母校旧校舎とグラウンド（中央手前筆者）

しばらく間を置いてから私の顔をしげしげと見つめ急にしんみりした和やかな口調になって、国鉄藤沢駅界隈の残像を懐かしむように話し始めた。藤沢中央劇場や藤沢オデオン座などすでに姿を消してしまった映画館の話、江ノ島や湘南海岸、そして小田急や江ノ電などの電車についても少年時代の思い出を呼び覚ますように話してくれた。挙句に藤沢駅南口に親戚がビルを持ち、「相澤土地」という不動産会社を経営しているので、機会があったら訪ねてやってほしいとまで話してくれた。

その時以来私はススムの言葉をずっと信じ込んでいた。ところが、プロ野球「高橋ユニオンズ」でともにプレイし、ススムが亡くなるまで親交を深めていた佐々木信也さんに、つい最近その話をしたところ、意外にも佐々木さんはススムの話にはまったく心当たりがなく信じられないと戸惑いを隠さなかったのである。

Ⅳ 当惑させられる大酋長の話

ススムがいずれは真偽がはっきりする不可解な話を、いとも気安く初対面の私に話してくれた真意は何か？ ススムの話には、なぜか理解しがたい疑問と矛盾が付きまとう。とりわけ佐々木さんにまつわる話は、佐々木さん自身はっきりと否定されるのである。不本意ながらその疑問を検証しつつ、それに伴うエピソードを紹介したいと思う。

①「トラックから引き揚げて中学は神奈川の湘南に入った」

ススムが拘っていた旧制湘南中学校だが、どういうわけか、「相澤進」という名前は、二〇一一年六月に発行された湘南高校創立九〇周年記念「同窓会『湘友会』名簿」の同学年卒業生の中に見つけ出すことができない。学校に問い合わせてみたところ、残念ながら今では卒業生、或いは在籍生徒の記録を誰一

人洩れなく確認するのは難しいとの回答だった。戦後のドサクサに紛れて全卒業生の資料が散逸していることに加えて、一九五八年（昭和三三年）二月深夜に発生した学校火災により校舎が全焼し、保存・管理されていた過去の在籍生徒の記録がすべて焼失してしまったからでもある。

ことに依ると戦後の時代背景と「相澤進」の個人的な家庭の事情から推して、中途退学した可能性も考えられるかもしれない。在学していれば佐々木さんより三年上級で、ススムとは同学年に当るはずの佐々木さんの兄道也氏の記憶に残っているのではないかと考え、佐々木さんを通じて道也氏に確認してもらったところ、道也氏から同級生の中に「相澤進」という名前に記憶はないとの返事をいただいている。

佐々木さんがどうしても理解できないのは、ススムが十代でプロ野球界入りするほど投手として傑出した実力を有しながら、なぜか編入した母校では在学中に創部されたはずの硬式野球部に入部しなかったことである。佐々木さんはススムがなぜ野球部に入らなかったのだろうかと首を傾げ、今でも信じられないと語っている。野球人の常識から考えても普通ではちょっとあり得ないとも言われる。投手としての実力は、「七色の変化球」を駆使して当時日本プロ野球界のエースでもあった、ハワイ・オアフ島出身で同じような環境に育った若林忠志監督がはっきり認めて、プロ野球選手へ導いてもらったくらいプロ入り前にすでに折り紙付きの力を持っていた。

それならススムはプロ入りの前にどこで硬式野球の練習をし、プレイをして、どこでその当時多忙だった若林監督に出会い、その実力を認めてもらったのだろうか。終戦直後で日本がまだ立ち直れなかった混沌としたあの時代に、そんなビッグチャンスや自らを売り込めるようなラッキーチャンスがそうそうあったとは思えない。どう考えても非現実的で想像しがたく不可解である。

しかももっと驚いたのは、佐々木さんがススムから湘南中学校に在学していたと聞いたのはごく最近になってからで、今からほんの一五～二〇年ほど前のことで、ある時訪日中のススムの方から問わず語らず話し出したという。だが、それは私がトラック島でススムから直接聞いた時から、指折り数えても大分後になってからのことである。

佐々木さんは例えプライベートな話題であるにせよ、どうしてもっと早く、できれば現役選手のうちにお互いに同窓生という共通の身近なルーツについて語ってくれなかったのだろうかと長い間ススムの胸の内が理解できなかった。当時は同じチームであっても投手は投手同士、野手は野手同士のグループで行動することが多かった。佐々木さんもチームの内野手仲間と好きなマージャンを楽しんだり、遠征先で歓楽街に飲みに行くようなことは度々あったが、ついぞ「先輩」であるススムとは卓を囲んだこともなく、屋台で一杯というようなこともなかった。ススムはチーム内にあまり親しい選手が

いなかったようで、どことなく孤立した様子だったと佐々木さんと仲の良かった当時の兵頭冽一塁手も証言してくれる。それだけに、もし選手時代にススムが先輩だと分かっていれば、チーム内でももう少し打ち解けて遠慮なく近づき、違った形でもっと親しく接することができたはずであると口惜しいような、幾分わだかまりのような気持ちが湧いてくるのは致し方なかった。

今にして悔やまれるのは、前項で触れたようにトラック島で初めて出会った時、折角ススムから母校でのクラブ活動について問われながら、もう一歩踏み込んで尋ねず、湘南中在学時の確かな情報をひとつも聞き出さなかったことである。

それにしてもなぜススムは初対面の私なぞへ気兼ねなく話してくれた同窓生の話を、現役時代に同じチームメートで親しかった「後輩」の佐々木さんにはいつまでも明かさなかったのだろうか。佐々木さんにとっても私にとっても、ススムの心情はなんとも不可解である。

②「佐々木信也は学校の後輩だから、俺が『高橋ユニオンズ』に誘って入ってもらった」

私がこう話した途端佐々木さんはちょっと怪訝な様子を見せた。そんな事実はまったくなかったと佐々木さんはきっぱり否定したのである。佐々木さんのプロ野球界入りは、あくまで佐々木さん自身が決断したとはっきり言われた。この点で私がススムから聞いた話とは完全に食い違っている。ススムは一九五三年若林監督とともに毎日オリオンズから誕生したばかりの高橋ユニオンズに移籍した時、佐々木さんをその新興チームに誘って入団させたと些か誇らしげに私に話してくれた。その当時社会人チームの強豪で、都市対抗野球大会出場の常連チームだった「東洋高圧」入りが内定しながら、プロ入りを誘われ頭を悩ませていた佐々木さんに対する殺し文句が「先輩の俺が同じチームへ入ってくれと頼むんだ」というものだった。

そこまでススムが母校の先輩であることをちらつかせながら口説いた高橋ユニオンズ入りだったが、実際には佐々木さんはその当時ススムには会ったこともなく、まして母校の先輩であることなぞ知る由もなく、あくまで自分自身の決断で入団を決めたと話されるのである。

③「信也はトラックの俺のところへ何度も遊びに来た」

ススムのこの台詞に対しても佐々木さんは、いままで一度たりともトラック島へ行ったことはないと笑いながら、これもまたはっきり否定された。確かにトラック島の周囲は海底まで透き通るようなエメラルド・グリーンで、ダイバーにとっては天国のようだから、時間がとれたら心身のリフレッシュのために遊びに来てはどうかと何度か誘われたことはある。いつぞやは冗談めかして「俺には息子が大勢いる。その息子のひとりに『シンヤ』というのがいる。その『シンヤ』に一

度会いに来てくれ」とまで言われたそうである。

しかし、日本から直行便がなく、どうしてもグアムで一泊しなければ行けない不便さについ足が遠のいていたと言う。結局トラック島を訪れススムを生み育んでくれた島を案内してもらう機会はついぞやって来なかった。

今にして思えばトラック島を訪れ、ブルーラグーンに囲まれたススムの美しい故郷を訪ねなかったことには些か悔いが残る。もし一度でもこのトラック島を訪れ、そこでススムや彼の家族に会い、島の自然環境や島の空気に触れていれば、別の視点からススムのやや理解しにくい思考回路の謎が解けたかもしれない。また、別の「ススム・アイザワ像」が描けたのではないかとも思う。だが、それにしてもススムがトラック島で私に話してくれた話と、佐々木さんから直接伺った話の内容とはまったく矛盾している。このギャップはどう理解したら良いのだろう。

なぜススムは佐々木さんが訪ねもしなかったトラック島へ何度も来たと本人に確かめればすぐ分かるような迂闊な言葉を軽々しく口にしたのだろうか。どうにも釈然としない。

Ⅴ プロ野球選手としてのススムと佐々木信也氏

ススムは異色の経歴の持ち主ではあったが、まさか日本のプロ野球界で活躍していたことなぞ、トラック島でススム本人の口から話を聞くまでは思ってもみなかった。いくら頭を巡らせても、南洋のトラック島と日本のプロ野球界との間に何ひとつ接点が浮かんでこなかったからである。

ススムは一九五〇年日本プロ野球界のセントラル、パシフィック二リーグ制発足に伴い、若林忠志監督に誘われてパ・リーグに誕生したばかりの毎日オリオンズに入団した。若林監督はその前年まで阪神タイガースの投手兼任監督だったが、その阪神時代の別当薫、土井垣武、本堂保次、呉昌征ら主力選手を引き連れ、電撃的に新生毎日オリオンズへ移籍した。創部早々にも拘わらず戦力が充実

「高橋ユニオンズ」で中心選手として活躍した

佐々木信也内野手、伊藤四郎投手、石川進外野手（左から）

した新チーム・毎日オリオンズは、初年度のペナントレース開幕と同時に破竹の勢いで突っ走り、見事リーグ制覇を成し遂げ、そのまま勢いに乗って日本シリーズも制して、日本のプロ野球二リーグ制史上最初のチャンピオン・チームとなった。加えて、若林監督自ら日本シリーズ史上最初の勝利投手となった。ススムも栄誉ある初代日本選手権チームの一員となったのである。そしてその優勝の三年後、若林監督は新たに誕生した高橋ユニオンズへ移籍し、ススムも信奉する監督と行動をともにして新興チームへ移った。

「相澤進」のプロ野球投手としての通算成績は、毎日オリオンズ時代の四年間と高橋ユニオンズ時代の三年間を併せた七年間の在籍中、実働は後半四年間で合計八三試合に登板して八勝一七敗、防御率四・二〇の成績だった。残念ながら高橋ユニオンズがずっと下位を低迷していたために、数字的にはプロ野球投手として格別目立つほどの実績を残すことはできなかった。

しかしながら、その高橋ユニオンズでは毎シーズン二〇試合以上に登板し、監督をはじめ首脳陣の期待には充分応えていた。肉体的には身長一七三㎝、体重六九kgの体躯から推して投手としてはさほど大柄ではなかったが、首脳陣からサイド気味に繰り出す得意のシュート、制球力、絶妙な投球術と物怖じしない度胸、そして試合勘を心得た冷静なマウンド捌きなどが買われてマウンドを任されていた。

ススムが毎日オリオンズから移籍した高橋ユニオンズは、屈辱的にもプロ野球史上最弱小チームと言われ、毎年のように最下位争いをしていた。ついにパ・リーグでは弱小チームにお灸をすえる意味で、年間勝率〇・三五〇を下回ったチームに対して、当時では破格の罰金五百万円を課すルールを制定したほど高橋ユニオンズは「勝てないチーム」だった。そもそも同一リーグ内に七つの奇数チーム数ではペナントレースの日程編成上どうしても一つのチームは試合が組めず、まる一日を無駄に費やすことになる。高橋ユニオンズはペナントレースの試合組み合わせの都合上無理やり作られたチームだったのである。

「高橋ユニオンズ」は、戦前大日本麦酒㈱社長を務め、戦後は第三次吉田茂内閣で通商産業大臣を務めた高橋龍太郎氏が、時のパ・リーグ会長・永田雅一大映社長に「野球が飯より好き」な道楽気分を巧みにくすぐられ、おだてられ、強引に説得されて作られたチームだった。いわば高橋氏が個人的に所有するチームと言ってよかった。実際高橋オーナーは野球が芯から好きだっただけに、川崎球場で行われたチームの主催試合には欠かさず応援に駆けつけ、メモを片手にゲームセットまで熱心に観戦し、チームの成績はいうに及ばず、選手ひとりひとりの個人成績の細かい点にまで関心を抱いていた。

ある時高橋オーナーが球場から帰る車の中で何かしきりに数字を計算しているので、運転手が「何を計算しているのですか？」と尋ねると「今日ヒットを三本打った佐々木(信也)君の打率を計算しているんだ」とにっこり笑って応えられた。そのくらい野球が好きなオーナーにはチームに対する人一倍強い愛着があったが、チームの実力は如何ともしがたく成績は低迷したまま球団経営は赤字続きで、流石に高橋オーナーもチームを手放さざるを得なくなった。新たにスポンサーとなった「トンボ鉛筆」も過重な資金負担に堪えられず、僅か一年で球

団経営から手を引き、再び高橋氏がオーナーに戻った。こうして毎年入れ替わり立ち代りスポンサーが替わった。これではファンから見放されるのも当然で、観客動員数も毎年最低ラインを低迷した。チーム名もオーナーの交代とともに、「高橋」から「トンボ」に変わり、「高橋」へ先祖帰りしたが、チーム発足後僅か三年で高橋氏個人が所有するユニークな球団「高橋ユニオンズ」は、ついに「チーム解散」という寂しい終末を迎えることになった。

しかし、発足当初の「高橋ユニオンズ」は戦力の整わない弱小チームではあったが、最初の年一九五六年には華やかな人気を背負った新人選手も入団した。その選手こそ東京六大学野球のスター選手だった慶応義塾大の佐々木信也選手だった。内定していたノンプロ球界入りを断って入団した佐々木選手のプロ入りは当時話題となり、チームの前途に大きな期待を抱かせもしたのである。

佐々木信也選手は、戦後第一回国体で優勝したサッカー部をはじめ、クラブ活動が盛んで文武両道でも知られる神奈川県立湘南高校へ入学と同時に、慶大野球部出身の父久男氏が監督を務めていた硬式野球部に入部した。一年上級には脇村春夫・前日本高等学校野球連盟会長がいた。その野球部は創部して僅か三年後の一九四九年(昭和二四年)夏の甲子園・全国高等学校野球選手権大会で、世間をあっと驚かす初出場・初優勝の快挙をやってのけたのである。

湘南高校野球部の全国大会初優勝は無欲の勝利と讃えられ、慶応義塾普通部が一九一六年(大正五年)の第二回大会で頂点を極めて以来、戦後初めて真紅の大優勝旗が箱根の山を越えたと大きな話題となり、爽やかな高校生チームの活躍は一世を風靡した。

この全国大会で佐々木選手は一年生ながら決勝戦・県立岐阜高校戦でもエースの花井悠投手(慶大、日本石油、西鉄)から逆転勝ちを呼び込むヒットを打って優勝に貢献している。その二年後の一九五一年春には初めて選抜高校野球大会にも出場し、主将として、また三番打者で守備の要の遊撃手としても活躍した。

高校時代は春の選抜大会に初出場、夏の全国大会は初出場にして初優勝、そして慶大へ進学してからは神宮球場の早慶戦でホームランをかっ飛ばして「早慶戦男」としてその名を轟かせた。最終学年には、慶大野球部主将として、「悲運のエース」と呼ばれた藤田元司投手(日本石油、巨人)とともに慶大野球部の投打の両輪として活躍した。まさにアマチュア野球界最高の栄誉を手にしたスター選手だった。

その佐々木選手はプロ入りした一九五六年のシーズンをチームやファンの熱い期待に違わず、チームのトップバッターとして大車輪の活躍をして全一五四試合の全イニングに出場した。これはその二年後に鳴り物入りで立教大から巨人軍へ入団して新人王を獲得した長嶋茂雄選手と並ぶ、たった二人だけの隠れた新人選手公式記録である。加えて六二二打数(歴代三位)、シーズン最多の一八〇安打(歴代三四位)、一四一単打は現在も新人記録として燦然と輝いている。佐々木選手は同年パ・リーグのベストナインにも選出された。歴代高橋ユニオンズの選手でベストナインに選ばれたのは、この年の佐々木選手ただひとりである。新人王も受賞して当然の成績だったが、新人王はこの年シーズン後半になって彗星の如く頭角を現し、チームを優

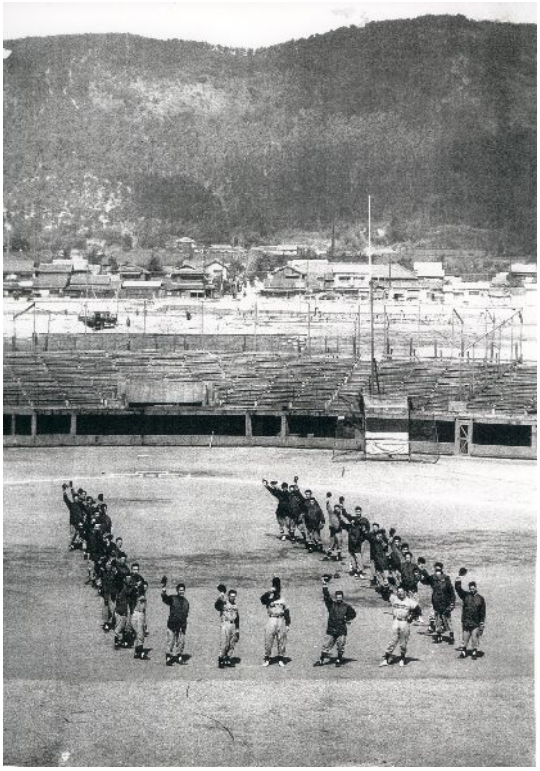
勝に導いた西鉄ライオンズの鉄腕、稲尾和久投手にさらわれた。

しかし、この新人王選出を巡っては、同じ湘南高校の同級生で当時売り出し中の芥川賞作家、石原慎太郎・現東京都知事が月刊誌「文芸春秋」に「弱小チームにあって一年間全試合、全イニングに出場してチームに貢献し、年間最終打率も〇・二八九の好成績を残してベストナインに選出された佐々木信也を差し置いて、いかに後半勝ち星を重ねて優勝に貢献したとはいえ、たまにしか投げない投手の稲尾和久を新人王に選出した野球評論家というものを私は信用しない」と不平たらたら不満をぶちまけ、同級生に対する贔屓目とは言いながら、そこまで言わしめて物議を醸したほどこの年の佐々木信也選手の活躍は目覚しく傑出したものだった。

佐々木選手は走攻守三拍子揃った名二塁手として縦横に活躍し、堅実な成績を残しながらも僅か四年でプロ野球界を去った。その後テレビ界に転進して、明るく清潔なイメージと知的でソフトな語り口が、野球ファンばかりでなく多くの人の心を惹きつけた。それまでの評論家と称せられる人たちやアナウンサー上がりとは一線を画し、新たに「スポーツ・キャスター」の分野を開拓した爽やかなトークは、フジテレビ系列の「プロ野球ニュース」で広く知られている通りである。

Ⅵ 残酷な解雇通告と複雑な胸の内

一九五七年のシーズン開幕を前にした二月のある日、高橋龍太郎オーナーの子息、高橋敏雄球団代表が前触れもなく岡山県営球場でスプリング・キャンプ中のチームを訪れた。高橋代表は全選手を前に、その場で頭を下げ苦渋を滲ませながらチームが解散することになったことを伝えた。公式には「高橋ユニオンズ、大映スターズに吸収合併」と記録されているが、実態はチームの解散である。事実佐々木さんもそう明言している。すでにキャンプ入りする前からチームが解散するのではないかと不穏な噂が流れ、中には戦々恐々の選手もいた。実際、蓋を開けてみて恐れていたことが現実となったのである。



ユニオンズの人文字‘U’を作って別れを惜しむ選手（横列右から2人目佐々木選手）

全選手を集めたその場でチームは正式に解散と伝えられた。同時に連盟の申し合わせにより、パ・リーグ前年度下位三球団から望まれる選手はドラフト方式で契約採用されることになった。三球団か

ら誘われた選手は、その場で名前を呼ばれて新チームに引き取られ、残る選手は無慈悲にも解雇処分ということが伝えられた。

三球団から声がかかった選手は下位チームから指名順に、七位大映スターズ、六位東映フライヤース、五位近鉄パールスと全選手の前で順次名前が呼び上げられた。前年活躍した佐々木さんはイの一番に「大映スターズ・・・佐々木信也・・・」とその名を読み上げられた。大映は佐々木さんのほかに十数人、東映は飯尾為男投手、石川進外野手ら六人、近鉄は前年二〇勝を挙げた伊藤四郎投手ら四人の選手を指名したが、残りの選手はついに名前を呼ばれることもなく、あまりにも唐突で非情な「解雇」処分を呑まざるを得なかった。新球団へ移る選手にはホッとさせる採用通知、その一方で解雇された選手にとっては屈辱的な宣告となり、いずれにせよ厳しく無情な裁定が下され、名実ともに高橋ユニオンズにとって最後のキャンプとなった。

佐々木さんはこの時の悲しい情景を思い出すと今でも辛くいたたまれない気持ちになり、止め処もなく涙が溢れ出てくるという。しかも、この時球団代表は選手を追い立てるように、引き取り先の球団が待っているので、すぐにも荷物をまとめて新球団へ合流してほしいと促した。まるで選手の気持ちに冷水を浴びせるような仕打ちだった。佐々木さんもすぐ荷物をまとめ慌しく新球団大映スターズのキャンプ地倉敷へ向かった。高橋ユニオンズはその日新天地で活躍する選手たちを力づける激励会や、別れを惜しむ送別会のようなセレモニーもなく、チームはあえなく解散という寂しい幕引きとなった。新チームに採用された選手はともかくとして、言葉ひとつで冷たい世間へ放り出された選手たちにとっては、将来の生活設計に対する不安が頭から拭いきれず、あまりにも冷酷な沙汰にただ呆然とするばかりだった。

佐々木さんが大映スターズからトップ指名されて恭しく迎えられていったのに反して、「先輩」であるススムはこの場で冷酷な解雇処分の通告を受けた。ススムは前シーズン二三試合に登板し、秘かに来るべきシーズンの活躍を期して春季キャンプに参加していた。当然チームにとっても貴重な戦力として考えられていたわけだが、経営者側の前代見聞にして驚天動地のチーム解散事情によって、突如一刀両断の下に「不要」と切り捨てられてしまったのである。

まさに「三界に家なし」である。

安穏で牧歌的な南洋の島に育ち、日本では社会人として組織の中で切磋琢磨して働くような機会もなく、これまで野球以外の資質を発揮するチャンスは与えられなかった。それが未だ戦後経済からの復興が完全に成ったとは言えず、誰も彼もが必死に生きようとしていた時代の日本社会へ裸のまま放り出されてしまったのである。突然解雇を言い渡されたススムの心中はいかばかりだったろうか。日本社会と日本人に対する不満や憤りが内心募っていったことは想像に難くない。チームとその年の正式契約を結び、来るべきシーズンの活躍を誓った矢先に、一方的な解雇通告により契約を破棄された不条理に対して何を思い、何を感じただろうか。

まだ二六歳という若さから改めて出直せるという自信とプライドよりも、球団側の一方的な都合で契約を解除され放り出された、屈

辱感と不満がわだかまってはいなかっただろうか。果たしてその時ススムの胸の中には、球団に対する不信感、恨みやつらみはなかっただろうか。理不尽な契約違反に対して、ススムは日本社会の冷酷さと不条理を思い知らされたに違いない。

社会全般に戦後の荒廃した匂いが漂っていたあの時代は、日本国内にまだ契約社会の意識や観念が充分備わっていたとは思えない。ススムはそんなことよりむしろ日本の社会に根づいていたはずの伝統的な義理人情の観念が、日本のプロ野球界でまったく示されなかったことに内心強い不満を抱き、無言の抵抗をしていたのではなかっただろうか。他の選手たちとはまったく異なる文化や風習の中に育ち、戦争の怖さと厳しさを身に沁みながら成長し、父親から聞かされていた日本という国の優秀さと日本人の勤勉と礼儀正しさ、さらに敬うべき日本文化と伝統などを、この時ススムは理解することができなかったのではないだろうか。一片の解雇通知でそれまでのチームに対する積年の貢献がいとも簡単に見捨てられていく非情な現実を、身を以って体験したススムは、自分なりに裏切られたと感じ、無言の抵抗をして抗議の意思を示したかったのではあるまいか。ススムは黙ってその場からチームを去り、以来チームメートの前に一切姿を見せることもなく、球団へ連絡してくることもなかった。

所属する高橋ユニオンズの解散を告げられてから一ヵ月後の三月六日、それぞれ新天地でプレイすることになった選手や、新しい道を見つけたかつての所属選手を交え、改めて岡山県営球場でチームの解団式が行われた。だが、チームの解散を告げられてから久しぶりに顔を合わせたチームメートは、「サヨナラ高橋球団」と書かれた横断幕を背に、無駄口を交わすこともなくこわばった表情のまま最後の集合記念写真に収まった。

この時チームから解雇されたススムは一体どこにどうしていたのか、ついぞグランドに姿を見せることもなく、世話になったチームメートや球団に別れの挨拶をすることもなかった。この日を境にススムは日本プロ野球界と日本社会に自ら決別の意思表示をしたのである。

佐々木さんはぽつりと寂しそうに言われた。

「どういうわけだか相澤さんだけいなかったなぁ」

「サヨナラ高橋球団」と書かれた横断幕が早春の風の中でだらしなく吊るされていたのが、何とも言えず哀愁を帯び象徴的だった。

その後ススムがいつ故郷のトラック島へ帰ったのか周囲の誰も知らない。ススムは誰にも離日を知らせることなく、ひとり寂しく日本を離れ、母や姉妹の待つトラック島へ戻って行った。胸の中に去来するものは果たして何だっただろう

ユニオンズナイン最後の集合写真（於岡山県営球場）

か。自分がこれまで歩んできた道を振り返り、これから向かう自らの厳しい将来をぼんやり思いながら複雑な気持ちに襲われたに違いない。一一年余の日本における生活は、決して自分の人生で欠落していたブランクを埋めてくれるようなものではなかった。果たしてこれから再び日本の土を踏むことがあろうか。ススムはいろいろ交錯する気持ちを抱えつつ、その未練をきっぱり断ち切って生れ故郷のトラック島へ帰っていった。

Ⅶ トラック島で再出発したススム

満天下に星の輝く生れ故郷は、戦後まもなく日本へ向かった時と何も変わってはいなかった。潮の香りが鼻をつく故郷の自然と、母ノツムールと家族をはじめとするトラック島の人々は、長い旅から戻ってきたススムを温かく迎えてくれた。ススムは島へ帰ってみて漸く自らの居場所を得たような安らいだ気持ちになった。島の人々の優しい人情は失意のススムの心をそっと癒してくれた。島で野球を楽しむ機会はそうあるわけではなかったが、それでも時には遊びとして島の人々と草野球を楽しむことがあった。

トラック島へ戻ったススムは改めて第一歩から自らの生活を築いていった。幸い狭い島の中で祖父が大酋長という影響力のある立場にいたことは、その後のススムの再出発に際して大きな力となった。戦争という悲惨な運命に翻弄され、他人が味わえない人生の岐路に立ってたびたび辛酸を舐めたとは言え、幸いにしてススムの身体にはこれからの長い人生でまだやり直しのきく若いエネルギーが残されていた。

しかし、ススムが日本からトラック島に帰ろうと思い立ったからといって、あの時代にすぐ故郷へ帰れたというわけではなかった。トラック島へ帰りたいと思ってもそこは外国である。当時の内外の外交事情と社会情勢がそう簡単に島へ帰ることを許してはくれなかった。いかに日本から離れたその島に生まれ、母や家族がその島に住んでいようとも、当時日本国籍を有した日本人が、まだ国連信託統治下にあったその小さな島へ渡ることは外交慣例上そう容易いことではなかった。漸くススムが懐かしい母と姉妹が待つトラック島へ帰ることができたのは、野球を辞めてから二年を経た一九五九年のことだった。

そのころ父庄太郎もまた、このまま母国日本で生活するよりも、妻と娘、そしてススムたちが待つトラック島へ戻り家族揃って生活することを強く望んだ。だが、庄太郎のトラック還りのための手続きは、ススムの時以上に難渋を極めた。一足先にススムに去られてひとり寂しく母国日本に取り残された父の、家族に対する愛情と慕情は募り、第二の故郷へのすがるような望郷の念はこらえ難いものとなった。父の切ない望郷の叫びを聞いて胸が張り裂けるような想いに駆られた母ノツムールにもまた夫恋しの気持ちが募り、夫の帰還を求めて毎日島の政治家や有力者の間を嘆願して周った。必要書類をいくつも取り寄せ面倒な手続きを済ませて、庄太郎が漸くトラックへ戻り家族揃って生活することができたのは、ススムが帰ってからさらに二年が過ぎた一九六一年だった。

その間島で事業をスタートさせたススム青年には失敗にもくじけな

い意思の強さと内に秘めたパワーが根付いていた。大酋長だった祖父とその親類縁者の支援もあって手始めに小売業から商売を始めた。最初の内は僅かな資金を親戚から都合してもらいながら、その利益を元手に新たな投資をして少しずつ事業を拡張していった。父が島へ帰ってきた一九六一年、ススムは森小弁の孫・リリーと結婚し、漸く気持ちも落ち着いて仕事に集中することができるようになった。その後ススムは家庭的にも苦しい道をともに手を携えて歩んだリリー夫人との間に、ナンシー、スミヲ、スミレの一男二女を得て幸せな家庭を築いていった。

私が初めてトラック島でススムに会った時、ススムは五二歳という働き盛りで、すでに島の大酋長の座に就き、誰からも「ススム」「ススム」と気さくに呼ばれてトラック諸島では誰一人知らぬ者とてない有名人として通っていた。島の中心部に開業した大きなスーパー「ススム・ストア」は、島民の必要と要望に応えて成功を収めていた。その後経営する小型船舶の機関エンジンを取り扱う島内最大のヤマハ代理店も順調な営業成績を示し、レストランやホテルの経営にも携わり、グアム銀行に土地まで貸して、ススムは大実業家として地域経済で大きな発言権を有し、島の顔役としてもその存在感を際立たせていた。

「酋長」という呼称や名称はどうあれ、その立場や役割の重要性はその地域によって千差万別である。酋長制度が存在しない日本では、その実態は誤解されることも多く、正しく理解されにくい。一般論として法律の存在しない未開社会では社会秩序を維持するうえで、昔から人望ある人物が長老や家長たちの寄り合いで慣習的に酋長やリーダーに選ばれたり、世襲制によって継承される事例が多い。それが近代になって広く法律の整備がなされ、多くの民主国家が法治国家として国民によって選ばれた選良による政治体制を施行するようになった。

今日酋長制の形態は、その呼称の一部が差別意識から誤解されるケースもあり、次第にその意味合いも変容してきている。将来的には制度自体の存在すら消滅する恐れなしとしない。しかし、現在トラック諸島においてミクロネシアの他の島々と同様に酋長制が容認され存在し続けているのは、公的権限は付与されずとも現行の法制度を損ねない範囲内で住民が望み、地域の交流を円滑にして、地域をま

訪日した大酋長を囲んで（前列中央ススム、その後佐々木氏）

於 芝パークホテル 1976 年３月

とめて地域の発展に側面的に貢献する地域のリーダーとしての役割と力が高く評価されているからである。伝統的なしきたりによって選出される酋長ではあるが、住民の厚い信頼を得て、住民とより心情的に結ばれているだけに、場合によっては行政や公的機関が立ち入れない分野で大きな役割を担っていた。これこそ「伝統的指導者」と言われる所以である。

ススムはその酋長職を継承して以来、責任ある慣習的な任務のほかに公共的な業務を補完的に委ねられることも多く、全島民を代表して彼らの考えや要望を行政に伝える役割を果たさなければならないことも度々あった。日本の厚生省から毎年便宜供与を依頼される太平洋戦争戦没者遺骨収集事業にしても、行政では中々介入しきれない地域住民との交渉や、土地の有力者との立ち入った話し合いなど役所が手の届かない場面では、ススム・アイザワ大酋長は島内の各酋長や実力者マサタカ・モリらとともに力を合せて、細かい配慮を示し日本の国家事業にも協力してきた。

終戦を迎えそれまでの日本の委任統治に代わって、アメリカ軍がミクロネシアへ進駐して来た。それに伴い中部太平洋海域は、マーシャル、ポンペイ(旧ポナペ)、チューク(旧トラック)、ヤップ、パラオ、マリアナの六つの行政区に分けられ、アメリカを受任国とする国連信託統治領となった。ミクロネシア地域行政の中心である高等弁務官事務所は、パラオ諸島コロール島からマリアナ諸島の「玉砕」の島・サイパン島に移され、国連信託統治領を統括する高等弁務官が地域執政のトップとしてサイパン島に君臨していた。

一九八六年チュークは、ポンペイ、ヤップ、コスラエ島とともにミクロネシア連邦として独立し、一九九〇年国連安全保障理事会はミクロネシア連邦の信託統治の終了を正式に承認した。

いまでもチューク島(旧トラック島)環礁周辺海底には旧日本軍の軍艦が沈み、ジャングルの中には埋没したように旧日本海軍の航空艦隊司令部や通信隊送信所、兵站病院、或いはその他の軍事施設が荒れ果てたまま放置されている。このトラック島では日米両軍による激しい地上戦こそ行われなかったが、米空軍機による爆撃により島の施設やインフラは木っ端微塵に破壊された。環礁海底に沈んだ艦船や、地上に放置された軍施設などは戦闘の生々しさを今に伝えている。島民の日常生活は限りなく不自由と不便を余儀なくされた。とりわけ水産業や、その他の一次産業に頼る島民の生活が損なわれたことはまぎれもない。島内のインフラ整備は遅れ、島民が負った心の傷も計り知れない。

そんなある年ススム・アイザワ大酋長は、行政サイドとは別にチューク州(トラック諸島)全住民の要求として、日米両政府に対して戦時損害賠償の要望書を提出した。ススムの要望書は戦争によって島民が受けた物心両面の補償を求めて住民訴訟を起こそうという島民の声を受け、日米両政府に対して全島民の悲痛な願いと考えを直接書面によって訴えたものである。アメリカ政府は一週間後即座に代表団を派遣して、ススムら各島の代表者らと話し合いを始めた。それに対して日本政府からはいくら待てども一片の書状すらなく、なしのつぶてのままついに話し合いが持たれることはなかった。日本政府に

とって戦時国家賠償はすでに解決済みとの判断だったのだろうが、丁寧な事情説明なり、情のこもった一言の挨拶もなかったことがススムの胸に突き刺さった。

アメリカ政府の賠償額は、ススムの言葉によればほんの「雀の涙」程度の金額だったというが、例え少額であろうと直ぐにも駆けつけ即刻交渉に応じてくれた、誠意ある対応には涙がこぼれたという。それに引き比べ、戦前戦中の支配者で、周辺海域一帯を血で染めた戦争を引き起こした張本人である日本政府の対応は冷たいものだったと、後になってススムはその辛くやるせない気持ちを佐々木さんにふっと漏らした。

Ⅷ 森喜朗元総理、亡父が築いたトラック島との縁

森喜朗元総理の父茂喜は、前記のように戦時中トラック島に駐留し、戦後は捕虜として連合軍にしばらく収監されていた。その後長い年月を経て図らずも元総理自身、亡父がトラック島に残した島民との心温まる絆により、トラック島との思いがけない細やかな草の根交流が芽生え、そしてススム・アイザワ大酋長と永久に友情の契りを結ぶことになった。

一九七七年一二月、自由民主党福田赳夫内閣の官房副長官を務めていた森元総理は、突然福田総理から呼び出された。ごく最近チューク州全域の伝統的な酋長会議議長（通称「大酋長」）に就任した日系人のススム・アイザワが、わざわざトラック諸島のトール島（旧水曜島）から日本の総理大臣へ議長就任の表敬挨拶に訪れ、ちょうど父茂喜が話題になったので、即刻官邸の接見の間へ来てほしいという首相秘書官からの慌しい電話だった。

サンケイスポーツ
人生の大ロマン・トラック島のゴッドファーザー
実は元プロ野球投手
大酋長で里帰り
「毎日」・高橋
あれから21年 変身の相撲選手
福田さんと友好
野球より上？外交手腕

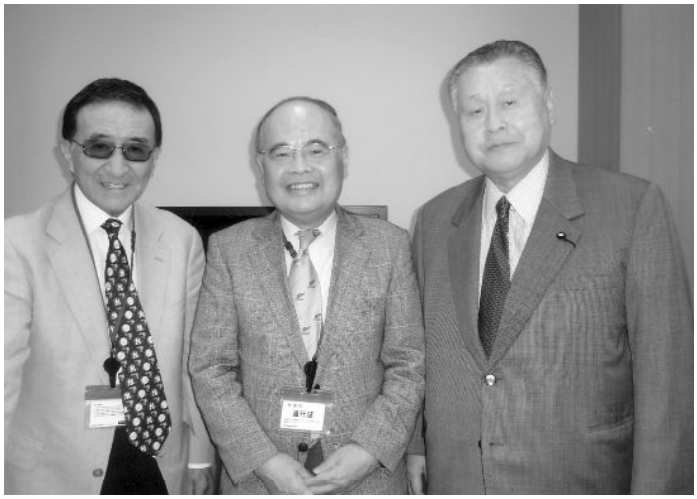
ススムの福田赳夫総理への表敬訪問を伝える新聞（1977.12.10 付）

急ぎ駆けつけた森官房副長官がそこで初めて会ったのが、ミクロネシア連邦チューク州酋長会議議長（大酋長）に推挙されたばかりのススム・アイザワだった。森副長官はまだトラック島を訪れたことはなかったが、生前亡父から戦時中のトラック島の様子について散々話を聞かされて、トラック島には強い関心を持っていた。それが大酋長の口から直接生前の父に関する身近な情報や噂を聞くことになり、また父が島の人々から強く慕われていたことを知って驚くとともに感激し、改めて在りし日の父を偲び父へのいとおしい思いを強くしたのである。

突然の出会いで短い会話だったが、ススムは戦前早大ラグビー部で活躍した父茂喜が、戦時中トラック島で多くの人々と広く交流を深めていたことをはじめ、イギリス人捕虜とラグビーの親善試合を行っ

ていたことまで率直に話してくれた。

父森茂喜はトラック島から復員後三六年の長きに亘って石川県根上町長(現・能美市)を務めたが、礼儀正しく正座して町民と親しく対話する謙虚な人柄で町民から広く敬愛され、町長退職時には退職金もすべて町へ寄付した篤志家としても知られていた。父は自分が早大ラグビー部で活躍したことから、終戦直後の食糧難時代には早大ラグビー部員がうんと食べて体力を養いたい時期にも関わらず、食糧不足に苦しみ練習もままならないことを知り、町の小学校と自宅を合宿所として開放し、役員と部員に思う存分食べさせて練習の場も提供してやっていた。



左から佐々木信也氏、筆者、森喜朗元総理

トラック島における父の島民やイギリス人との全人的な交流といい、ラグビーを通した父の友愛的なボランティア活動といい、それを聞いていた森副長官にとっては心が和むひとときであり、尊敬する父を懐かしく思い出させてくれた瞬間だったのである。

森副長官自身父親の影響を受けて高校時代はラグビー部主将として活躍し、早大進学後は胃潰瘍に罹り退部を余儀なくされたが、一時「早稲田大学体育局ラグビー蹴球部」(早大ラグビー部正式名)の一員でもあった。

現在は財団法人日本ラグビー・フットボール協会会長として、愛して止まないラグビーの普及と発展、そして日本ラグビーの強化に並々ならぬ情熱を注ぎ、二〇一一年九月ニュージーランドで開催された第七回ラグビー・ワールドカップには、日本代表チームの激励と応援にも駆けつけている。政治家・森喜朗にとって、亡き父は実父であると同時に、同じラガーマンとして、またスムは同じスポーツマンとしてお互いの気持ちに相通ずるものがあったに違いない。

トール島を発つ前にスムは父に纏わる話を、父をよく知る島民から何度も聞いたうえで、森副長官との出会いを楽しみにしていたのである。

一方、森副長官もそのころ何とか一日も早くトラック島を訪れてみたいとの気持ちに駆り立てられていた。それは父からの言い伝えばかりでなく、むしろそれにも増して最近トラック島を訪れた長男祐喜から衝撃的なハプニングを聞き、強い衝動に駆られたせいでもある。

そのハプニングというのは、社団法人日本ミクロネシア協会(現太平洋諸島地域研究所)主宰により日本とミクロネシアの子ども相互交流事業が実施されていることを小耳に挟んだ森副長官が、中学一年

生の祐喜がもしそのプログラムに参加することができれば、戦中戦後にかけて祖父茂喜が戦い苦労したトラック諸島トール島（水曜島）を孫の祐喜に知ってもらう良い機会になるのではないかと考え、祐喜をトラック島へ送り出した時のことである。

祐喜ら子どもたちが、ススムのかつての生活のベースだったトール島（水曜島）の要塞近くを訪れた時、案内した島民がここで日本軍守備隊は敵軍と激しく戦ったが、その時の隊長は《モリ》という人だったと説明した。その時祐喜が、

「それはぼくのおじいちゃんだよ」

と話した途端、案内役の島民は真剣な顔つきで、

「本当かい？《モリ》という苗字の人はどこにもいるよ。名前は何て言うの？」

と尋ねた。

「ぼくのおじいちゃんは《モリ・シゲキ》です」

その名を聞いて島民は腰を抜かさんばかりに驚いた。子どもの口をついて出たその名こそ、島民の誰もが敬い慕っていた「森茂喜」、その人だったのである。戦後三〇年を経てなお森茂喜大隊長は島では忘れられることなく、また親しかった島民の記憶からも消えることなく、心から敬愛されていた。しかも父茂喜大隊長が戦った要塞には森大隊が故国日本へ帰ってからも、ほぼ毎日のように島民たちが父と大隊兵士のために食べ物を届けてくれていたというのである。

長男祐喜が森茂喜大隊長の孫だと知った島民は、あまりにも運命的な出会いと神の導きにただ驚き感動した。島を去るまで祐喜は祖父を知る多くのトラック島の人々から親切にもてなされ楽しい時を過ごすことができた。トラック島から帰るや祐喜は興奮したまま、一気にその話を父喜朗に話し聞かせた。祐喜から話を聞いた父は、まだ会ったこともないトラック島の人々への感謝の気持ちとともに、そこはかとなく熱い慕情を感じたのである。

それから長い時空を超え、日本人として頂点の内閣総理大臣の座にまで上り詰め、その総理の激職を辞してまもなく、二〇〇一年九月森喜朗前総理は初めて念願のトラック島を訪れた。国会議員として多忙な時間を割いて、初めて父への想いと息子の思い出が二重写しになったトラック島の土を踏み、前総理はスム・アイザワ大酋長との懸案の約束を漸く果たすことができて感慨無量の想いに捉われた。

その時森前総理を迎えたトラック諸島・春島（現ウエノ島）のチューク国際空港ではレオ・ファルカム大統領をはじめ、多くの国会議員、スム・アイザワ大酋長ら各地区酋長らが温かく出迎え、そのまま島の伝統的な御輿に乗せられたままパレードに移ったほど心のこもった、島を挙げて、否、国を挙げての熱烈な歓迎ぶりとなったのである。驚いたことに、島内の学校はその日「森喜朗・前日本国総理大臣来訪」を心から歓迎する気持ちを表し全校臨時休校とされ、道路の両側には子どもたちが手に手に日の丸の小旗を振って温かく迎えてくれた。

ススムはそのまま森前総理に付き添って港までエスコートし、この日森前総理に乗船してもらうためにわざわざ造った新造船に案内した。環礁内にあるススムの島・水曜島（現トール島）へ向けて春島を離れる

や、前総理とススムが乗った新造船には大漁旗を掲げた多くの船舶が付き従い、突き進む船団は恰も華やかな一大デレゲーションとなったのである

水曜島へ向かう途中には、通りかかった目の前の小さな無人島を、ススムが「モリ島」と名づけ森家に寄贈するという思いがけなく嬉しいハプニングまであった。

勇躍水曜島へ上陸する直前になって、森前総理はススムから一本のバナナと天麩羅などの食べ物を乗せたお盆を手渡された。やや満腹感を憶えていた前総理が一瞬戸惑い遠慮するしぐさを見せるや、ススムはすかさず、これは亡父茂喜に生前ススムの母が気持ちを込めて用意し、ススム自身子どものころからいつも届けていたものとまったく同じものだと説明した。それを聞いて前総理はススムの心のこもった配慮に思わず感涙し、父を追憶しながらススムの言う通り要塞にお供えした。ススムから説明を聞いているうちに前総理は、ススムらトラック島の人々の温かい気持ちと亡父を忘れずに敬愛してくれる心情に心を動かされ、思わず目頭が熱くなり涙がこみ上げてきた。これほどまでに亡き父を島の人々がいとおしんでくれていたのかと思うと、アイザワ家と島の人々の篤く誠実な真心が心に沁み感激も一入だった。

トラック島に滞在していた間、総理を退いて間もない森前総理にとっては直近の分刻みの忙しさから解放され、トラック諸島環礁内の島々をススムに案内してもらったり、ススムやススムの家族と心を開いて語り合ったりしながら、日本とミクロネシア連邦の友好と経済協力関係について心ゆくまで話し合った。

このトラック島訪問を境に大酋長ススム・アイザワと政治家森喜朗の二人の友情はより一層深まり、お互いに心の往き来を重ねて、それはススムが亡くなるまで続いた。

森元総理はかねてより個人的な心情として、また国家としても戦前から今日まで長年に亘り、切っても切れない関係にある日本とミクロネシア連邦両国の永久の友好と経済協力に心を砕いてきた。

初めてトラック島を訪れた前年の二〇〇〇年四月には、宮崎で開催された「第二回日本・太平洋諸島フォーラム首脳会議」(通称「島サミット」)における主催国の総理大臣として、またサミット共同議長として基調演説を行った。その時のスピーチ「私たちのフロンティアへの旅立ち」の中で、進みつつあるグローバル化の流れの中で人材育成の視点から積極的な人材養成と知的ネットワーク構築の推進を強く訴え、ミクロネシアをはじめとする太平洋諸島への支援を約束したのである。

具体的な例として、ミクロネシア連邦の首都パリキール(ポンペイ州)国際空港滑走路拡張工事に対する政府開発援助(ＯＤＡ)が決定した。それに伴いその実現に力を注いできた森元総理は、二〇〇八年九月、義理の甥である参議院議員岡田直樹・国土交通大臣政務官を伴い、工事進捗状況視察のためミクロネシア連邦ポンペイ州(旧ポナペ諸島)とチューク州(旧トラック諸島)を訪問した。チュークの訪問はその二年前に亡くなったススム・アイザワ大酋長の墓前にそのことを報告することも目的のひとつだった。

近年日本人の海外旅行者が増加する中で、周囲を澄明な海に囲

まれ、ダイビングに絶好のミクロネシアへの日本人観光客が一向に増えないばかりか、むしろ減少傾向にある。その原因を突き止めてみると大型旅客機が離着陸できない短い滑走路など航空インフラの未整備が大きなネックになっている。近くのマリアナやパラオには日本から大型旅客機による直行便が運行されているが、ミクロネシアには国際空港とは言いながら、大型機を受け入れる施設が充分整備されていないことが大きな原因である。幸いにもその不便な実態がこの度のODA援助により何とか解消される見通しが立った。二〇一二年には初めて日本から大型チャーター機が飛び、いずれ大型旅客機が定期運航して多くの日本人がミクロネシアを訪れるようになり、地域の開発のお役に立てるようになるだろう。これにより漸くお世話になった、今は亡きスム・アイザワ大酋長や、トラック島の人々に幾分かでも恩返しができるのではないだろうか。森元総理の胸の中にほんの少しばかり安堵感が湧いてきた。

森元総理は、亡父とトラック島民がとこしえに結ばれた絆、そしてスムとの友情を想い、やがて日本から飛び立つ直行定期便の運航を想い、感慨深くならずにはおられなかった。

先年サイパン島へ慰霊巡拝された天皇・皇后両陛下が、いつの日かこのミクロネシア海域においても戦没者慰霊のために巡幸なされることを秘かに祈念して止まないのである。

それにしても、日本海に臨む片田舎の一ラガーマンが不幸な戦争を乗り越えて、日本から遥か離れた太平洋上のトラック島との縁と島民との絆を結実させ、それがいまや代替わりして、かたやチューク州酋長会議議長、こなた日本国内閣総理大臣として結ばれたのも輪廻を思わせる不思議な縁である。

これも人生の綾であり、縮図であろうか。父の第二の故郷トラック島を想い、またいつまでも恩義を忘れない亡きスム・アイザワ大酋長をはじめとするトラック島の人々を想い、元総理の胸は熱くなり一層感慨深く感じるのである。

Ⅸ両国の架け橋、甥のジョン・フリッツ駐日大使

トラック島へ帰ってから事業に成功したスムは、島の人々の幸せのため、島民の生活向上のため、住みよい島作りを心がけて損得を考えずボランティアとして積極的に活動した。地域の輪、人々の和、そして島全体の経済発展と生活向上を考え、地域の人々の相談に乗り献身的に行動した。スムは日本では旧制中学を終えただけで、決して高度な教育を受けたわけではなく、アカデミックな専門知識や豊富な社会知識を持ち合わせているものでもなかった。すべてスムの行動パターンは、自らの実践的な経験が生み出した人並みはずれた行動力学に根ざしていた。トラック島の名門家系の血脈を受け継いで一族から支えられ、事業を行う過程で多くの人びとと知り合い築いた人脈もまた、一層スムの行動力を支えてくれた。

地域の安定的な発展のためには、時に私財を投げ打ってまで行動する信念とその姿勢は、多くの人々から深く信頼され、それがスムの行動指針となり彼自身の行動を一層後押しすることになった。

決して地域の政治や自治行政へ足を踏み込むことをせず、彼らから相談を受ければ相談に乗るという謙虚なスタンスを崩さなかった。

中には事業に成功し資産家として評価を高めていったススムを妬む輩もいたが、ススムは一切耳を傾けずひたすら地域社会のために貢献した。政治への強い誘いもあったが、政治活動はミクロネシア連邦初代大統領になった親友で縁戚のトシヲ・ナカヤマに託し、政治へはそれほどの関心を示さなかった。政界へ出ればススムの能力と人脈を持ってすれば相当な地位にまで上り詰めることができたであろうとはススムを知る誰もが一致した見方である。実際ススムの人脈リンクは幅広く固い絆で結ばれていた。ススムの姉ミサコとトシヲの兄タダシが結婚している。つまりススムと初代大統領トシヲ・ナカヤマは親戚なのである。また、妻リリーの地縁により、モリ現大統領はススムにとって義理の「従兄弟の子」の間柄なのである。

ススムは一一年余を過ごした父の母国日本と、母と自らの母国ミクロネシア連邦との友好と経済協力を願うとともに、日本との間に日系ミクロネシア人としての心情的な連帯感のようなものを強く感じていた。その気持ちを何らかの形で日本とミクロネシア連邦を結ぶ精神的な絆として永久に残し伝えたいと願っていた。

その橋渡しとして期待をかけたのが、ススムの妹ヒサエの三男、ジョン・フリッツ現駐日ミクロネシア連邦特命全権大使だった。ススムはアメリカ・カリフォルニア州サンディエゴのハイスクールを卒業した甥のジョンを、自分も育った藤沢市内の相澤本家に下宿させ、ススムが全面的に就学支援をしながら立地的に交通至便な東海大学へ留学させた。

ジョン・フリッツ大使（右）と筆者

一九八〇年に初めて来日したジョンは、東海大学の別科日本語研修過程で一年間日本語を学んだ後、教養学部国際学科へ進学し、その後政治経済学部経済学科へ編入した。百恵夫人とは教養学部国際学科在学中に同学科在籍の夫人が学生新聞の取材でパラオに派遣された縁で結ばれた。現在フリッツ大使が民間の活動に意欲を示されているのも、同じ志の夫人の内助の功が与って大きな力となっているのではないだろうか。

日本で経済学修士号を得たジョンは、その後母国の外務省に勤め、今奇しくも駐日ミクロネシア連邦特命全権大使として、ススムが感じていた日系人としての心情や親近感を心象化し、ススムが望んだ日本とミクロネシア連邦の架け橋となって外交面で大童の活躍をしている。また国を代表する多忙な特命全権大使としては稀に見るほど、日本における民間の活動に自ら積極的に参加し、自身ホームページで一般の日本人との交流を公開して、直に庶民の視点から草の根の交

流を深めるなど八面六臂の奮闘ぶりである。

特にフリッツ大使が公式面で積極的な関与をしたのは、図らずもミクロネシア連邦の発展に熱意を注いでいる森喜朗元総理が総理在任中に基調演説を行った、三年毎に開催される「島サミット」である。大使は在日ミクロネシア連邦大使館一等書記官、駐日公使時代を通じ二〇〇八年特命全権大使になってからも積極的に当プロジェクトに関わっている。

私が森元総理から直々に紹介されてフリッツ大使にお会いした時、大使は島サミットの理念、方向性、将来像、日本人観光客誘致などについて熱く語ってくれた。夢を語りかけるように熱を込めて話す大使のその姿に、ススムの人生観とススムが描いていた夢と理念を二重写しに見たような気がした。

今日個人的な関係から日本とミクロネシア連邦両国の外交関係を見ても、日系人であるエマニュエル・マニー・モリ大統領には心情的に日本にシンパシーを感じられるものがあり、アリック・アリック現副大統領もかつてフリッツ大使前々任の駐日特命全権大使として赴任し、日本に対して殊のほか理解が深い。そのアリック副大統領は駐日大使離任後に国会議員となって、現在国の№2である副大統領の要職に就いている。かつてアリック元大使の謦咳に触れ、今日本で活躍しているジョン・フリッツ大使も、いずれ政治の道に進むに違いない。そしてススムの期待通りフリッツ大使は、日本とミクロネシア連邦両国の架け橋としてこれからも両国の間に一層強い絆を結んでくれるだろう。森喜朗元総理もそのことを固く信じているのである。

大正、昭和、平成の三つの時代に亘る日本とトラック島の交流の歴史においてアイザワ家が、ススムをコアにして父庄太郎からススム、ススムから甥のジョンの三世代が大きく貢献していることはまぎれもない。ススムはジョン・フリッツが外交官として両国間の友好のために日夜努力されている姿を、泉下で頷きながら見守ってくれているに違いない。

X プロ野球始球式で最後の一投

岡山県営球場で別れてから佐々木さんが久しぶりにススムに会ったのは、それから一〇年以上も経ってからのことである。大使館関係者と親戚以外に日本に格別親しい知り合いがいなかったススムが、プロ野球を辞め連絡を絶ってからどこでどう調べたのか、突然ススムの方からアプローチしてきた。佐々木さんの誠実な人柄を信頼し、また心の中にはどこか同窓生として頼る気持ちがあったのだろうか。そしてその後さらに長い年月を重ねて、佐々木さんに湘南高校の同窓生であることを打ち明けてからは、ススムは一層心を開くようになり、二人の仲は急速に接近していった。ススムは佐々木さんの誠意の篭った配慮と温かい友情を忘れることなく、日本との連絡では常に佐々木さんを頼りにするようになり、訪日の折には必ず連絡をくれた。

二〇〇六年のプロ野球シーズン開幕を前にして、しばらく連絡のなかったススムから、不意に佐々木さんのもとへ国際電話がかかってきた。それは日本のテレビ番組に出演するため近々ススムが訪日する折に、プロ野球公式戦の始球式で何とか一球を投じることができないだろ

うかという思いもよらない相談だった。ススムの願いごとはあまりにも唐突で、そんなに気安く請け合えるような話ではなかった。

しかし、ほかならぬ母校の「先輩」から何とかして始球式で投げてみたいと並々ならぬ願いを聞かされた佐々木さんは、実際に実現できるかどうかは確約できないが、少しでもお役に立てるなら「先輩」のために一肌脱いでみようと思った。

話をつけやすい球団としては、二人が一緒にプレイした高橋ユニオンズ、一九五〇～三年にススムが所属した毎日オリオンズ、そして一九五八～九年に佐々木さんがプレイした大毎オリオンズの歴史と伝統をそっくり引き継いだ、現在の千葉ロッテ・マリーンズが最も相応しいのではないか。ススムから話を聞いた佐々木さんは、早速往年のトップバッターらしいフットワークを活かし千葉ロッテ球団に相談した。佐々木さんから話を持ちかけられた千葉ロッテ球団渉外担当者は、ススムの球団創成期に活躍した実績、異色の人生経歴、人柄、歩んだ野球歴、退団の経緯、更にはトラック島における現在の大酋長としての社会的・政治的立場等を交えて真剣に話す佐々木さんに耳を傾けて聞いてくれた。希望を受け入れてもらえる可能性は五分五分だと割り切りながらも、微かな希望を抱いて球団からの返事を待っていた。それから数日して佐々木さんのもとへ千葉ロッテ球団からススムの希望を喜んで受け入れたいという嬉しい回答が伝えられた。

こうして「ススム・アイザワ投手」にとって最後の晴れ舞台であるプロ野球公式戦始球式のお膳立ては整えられたのである。

二〇〇六年四月一三日、かつて毎日オリオンズと高橋ユニオンズで活躍した「相澤進投手」は、千葉ロッテ・マリーンズ対福岡ソフトバンク・ホークス戦に先立ち、感慨無量の想いで浜風のそよぐ千葉マリーン・スタジアムのマウンドに立った。プロのマウンドを離れてからすでに半世紀の時が流れていた。

しかし、この時すでにススムの肉体はボロボロだった。悪性腫瘍によって身体全体が大分蝕まれていた。一〇年ほど前には、壊疽(エソ)により東京都内の都立墨東病院で手術を受け、右脚を大腿部から切断した。隻脚で不自由な身体を佐々木さんが肩を組んで支え、マウンドまでエスコートするほど猶予ならない健康状態だった。念願の最後の一投は正規のマウンドではなくホームベースへ少し歩み寄った位置から投げることになった。

それでもグランドに立つとススムは確かに身体こそ不自由そうに見えたが、往時を想い自分の良き伴侶だった野球をいとおしむかのように、グランドの雰囲気とボールの感触を楽しんだ。固唾を呑んで見守る両チームの選手やスタンドのファンの中に身を置いてみると、もう思い残すことは何もなかった。チームの名前こそ変わったが、かつて自分が所属したチームの後輩たちを目の前に、波瀾の人生に万感の思いを込めた最後のボールは、走馬灯のように回るメモリーの中で、ホークスの先頭打者、川崎宗則選手に対する忘れられない一投となった。

投球を終え潮風を胸いっぱいに吸い、ひとり納得したのかススムの顔には自然に笑みがこぼれた。たっての望みを叶えたススムは万雷の拍手の中をゆっくりマウンドから降りた。そのまま自分のために晴れ

舞台を演出してくれた、かつてのチームメートである「後輩」の佐々木さんのもとへ歩み寄り、佐々木さんの両手をしっかり握り、涙を滲ませながら心から感謝の気持ちを伝えた。

・・・・・・・・・

そして、あの懐かしく思い出深い始球式から程なくして、慌しくトラック島から悲報が届けられた。それは胸を抉られるようなあまりにも残酷な知らせだった。あの思い出深い始球式から僅か一ヶ月後の五月一八日、あれほどの偉丈夫だったススム・アイザワ大酋長が突然故郷のトラック島で永久に帰らぬ人となってしまったのである。日本とトラック島で波瀾万丈の生涯を送ったススムの死は、あまりにもあっけなかった。

ほんの一ヶ月前に「先輩」のために犬馬の労をとった佐々木さんは、ススムの突然の訃報に接して愕然とした。あのカリスマ的な「先輩」が今度は一言の別れの言葉を交わす間もなく、あっという間に冥界へ旅立って逝かれたのである。

考えてみるとあの始球式のお膳立てを佐々木さんに頼んだのは、ひょっとすると自らに迫り来る死を悟ったススムが、日本で一番頼りにしていた「後輩」の佐々木さんに人生最後のワガママを言い、思い出深いプロ野球界と、父の祖国日本に別れを告げる花道の舞台回しを頼んだのではなかっただろうか。

突如襲ったススムの死は、佐々木さんにふっとそんなことを頭によぎらせた。思い返してみると佐々木さんにとっても、ススムの人生における最後の場面で、究極の願いと思い出作りに手を貸してあげられたことがせめてもの慰めだった。その思いが叶ったススムは冥界の入口で立ち止まり、日本でお世話になった人たちの顔を思い浮かべて感謝し、これまでの苦難に満ちた辛い日本の思い出から、懐かしく楽しかった日本の思い出にすっきりとスイッチを切り替え、心おきなく父母のもとへ旅立たれたのではないだろうか。

それにしても大酋長ススム・アイザワは、戦争という暗い時代を挟んで太平洋上の小さな島・母の母国トラック島と、父の母国日本を往き来しながら、生きんがため必死になって負わされた運命に立ち向かい過酷な生涯を貫いた。そのプライドに満ちたひとりの男は、今では日系人のしたたかな生きざまとして強烈な印象を植えつけてくれると同時に、生きていくためのひとつのポジティブな目標を与えてくれているように思える。

おわりに

三〇年近く前、偶々仕事のうえで中部太平洋上のトラック島でススム・アイザワというエネルギーの塊のような人物に会った。その時以来、その強い個性的な印象がまだ脳裏から消え去らないうちに、そのススムが突然この世を去ったことを知らされた。忘れられない「先輩」ススム・アイザワをそれとなく思い返していると、次第にススムのイメージが感動とともに鮮やかに蘇り、何とも言えない懐かしさがこみ上げてきた。

ススムは私にとっては稀に見るほど強い個性と信念を持ち積極的で、

一面カリスマ性を帯びた魅力的な「先輩」だった。人並みはずれて個性的で闘争心と逞しい生命力を身につけ、それ故にこそ日本のプロ野球界で見せた反骨精神をバネに、その後幾多の艱難辛苦を乗り越えることができた。そしてついにはトラック諸島のゴッドファーザーとして全島民の頂点に立ち、彼らの信頼と敬愛を一身に集めて全島三六人の酋長から推挙されて偉大なる「大酋長」の地位に上り詰めるまでの栄誉を掌中に納めることができた。けだし日系人の誉れと呼んでも良いのではないだろうか。

ススムが度重なる挫折にもめげず栄光の座に上り詰めることができた陰には、一一年間余りの日本における人知れぬ苦労や厳しい試練があったことは間違いない。予断は許されないが、ひとつには少年時代の「湘南中学校在学」時における、他人には言えない悩みや精神的な煩悶があったのではないだろうか。もうひとつは、「高橋ユニオンズ解散」時における一方的で理不尽な解雇通告にあったのではないだろうか。それらが燃えたぎるマグマとなって、時には寡黙にして謎めいた理解しがたい言動となって表われ、しばしばススムを知る一部の人の気持ちを惑わせてもいた。ススムの燃えるようなエネルギーは、「今に見ていろ！」の内にこもった屈辱感の爆発と、日本人としての屈強な精神力とないまぜになった「大和魂」を支えに、闘った類稀なる行動力にその源泉があったのではないだろうか。

「後輩」の佐々木信也さんは最後まで「先輩」であるススムのことを気に留めながら、日本ではいつも相談に乗りその後半生においても親しく交流を続けていた。

その佐々木さんは、今でも「最近まで相澤さんが高校の先輩とは知らなかった」「高橋ユニオンズ入団は相澤先輩の勧誘ではなく自分が決断した」「トラック島には一度も行ったことがない」と仰るのである。私がススム・アイザワ「先輩」から直接伺った話と佐々木さんの話はなお両極にある。真相を秘すススムがすでに黄泉の国へ旅立った今となっては、「本当はどうだったのか？」との疑問を確かめる術はない。

しかし、あの偉大な大酋長が話してくれたストーリーについて細かい詮索をするのはもう止めようと思う。ことの真偽は別にして大酋長が語った以上、それはそれで素直に受け入れ、或いは聞き流しても良いのではないかと思う。大酋長の大酋長らしさはそのままにしておき、大酋長のカリスマ的な領域にはもう立ち入らないようにしようと思う。逆境の中で克己しつつ自らの力と存在感をアピールして、地域コミュニティーのリーダーである大酋長となって、島では多くの島民から尊敬される立場にあった。

ススムは社会公共的な面ばかりでなく、政治的にも大きな影響力を持ち、初代トシヲ・ナカヤマを始め歴代のミクロネシア大統領ですらススムに一目置いて頼りにしていたのである。その実績と存在感、そしてススムの島における強い影響力はとてもここには紹介しきれない。普通ではとても計り知れないスケールの大きな「先輩」だった。これ以上大酋長の言葉をとやかく詮索し、中傷するのは個人的にお世話になった「先輩」である大酋長に対して僭越であり、礼を失することになるのではないかと思うからである。

ススムの言動は謎めいていて型破りではあるが、よく考えてみると今

も自らの信念を行動で示せとわれわれ現代人に無言の示唆を与えてくれているような気がしてならない。ススムの存在とパフォーマンスは、現代の日本社会に目を転じると、とかく規則にばかり縛られて思い切った行動に出ず、小さくまとまる内向き志向の人間が多くなった現代の風潮と世相に対する、強烈な警告でありアイロニーのようにも思えてくるのだ。

考えてみると生前ススムが願っていた理想とは、究極的には両親の二つの母国のお互いの血脈的な伝統を理解しあったうえで、それぞれの母国がお互いに助け合い、手を携えて友好を深めることであったに違いない。ススムは今日ミクロネシア海域住民の約二割が日系人であるという血縁的な関係に、目に見えない近縁種のテレパシーと仄かなるノスタルジアを感じていたのではないか。即ち南米や東南アジアの一部の国とは幾分異なった血縁的なつながりを感覚的に呼び覚ます、古き良き時代に渾然一体となった伝統、文化、風習を残し伝え、近代の社会制度に融合させてミクロネシア社会に日系人が飛翔した確たる痕跡を伝承することを願っていたのではなかっただろうか。

例え歩んで来た人生のプロセスにおいて、好ましからざる体験や筆舌に尽くしがたい苦労があったにせよ、後年その苦労は充分でないにせよ多くは報われ、かつてススムが目指したゴールはそう遠くにあるわけではない。残されたゴールまでタスキをつなぐのは現代に生きる人びとにこそ課せられた責務ではないだろうか。

二〇一一年五月ススム・アイザワの親戚筋が経営する神奈川県藤沢市内の不動産会社を訪ねた。初めてトラック島で会った時、ススムから機会があったらぜひ訪ねてみてほしいと言われた「相澤土地株式会社」である。一九二五年（大正一四年）創業の地元ではかなり名の知られた老舗企業である。

親戚の会社社長・相澤光春氏

あの時以来あまりにも長い時間が経過した。それでも何とかススムとの約束をほぼ三〇年ぶりに果たすことができた。同社代表取締役の相澤光春氏は、ススム・アイザワにとって従兄弟の子に当り、血縁的なつながりがあるとは言え、年齢的にはススムとやや離れていて、お互いに会ったのは戦後大分時間が経過してからのことである。

意外なことに相澤氏は、いま藤沢市内で建設業を営む佐々木信也さんの末弟とも、仕事上で深いつながりがあると話してくれた。これもススムが残してくれた遺産のひとつと呼んでも良いのではないだろうか。

今にして思う。せめてもう一度トラック島の満天の星空の下で、ビールでも飲み交わしながら「大先輩」であるススム・アイザワ大酋長からじっくり話を聞いてみたかった。

（日本ペンクラブ会員）